

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2490400062		
法人名	株式会社シルバーアシストのぼの		
事業所名	グループホーム白鳥		
所在地	三重県亀山市能褒野町82-1		
自己評価作成日	令和2年10月1日	評価結果市町提出日	令和3年1月7日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaizokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&JizyosvoCd=2490400062-00&ServiceCd=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和 2 年 11 月 20 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

温かい笑顔・優しい気持ち・わかりやすい言葉をモットーに接することを心掛けており、全職員がチームワーク良く、向上心を持って働いている。
職員は全員女性で、年齢層も幅広くユーモアがあり、笑顔・気配り・優しさを心掛け、利用者がその人らしい生活が送れる支援を行っている。
フロアでは、出来る作業を手伝ったり、テレビを楽しんだり、花を見たり、朝夕通学する小学生を眺めたりと、皆さんそれぞれがゆったりと過ごしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

設立から約10年、「温かい笑顔・優しい気持ち・分かりやすい言葉」という理念に添った支援やコミュニケーションが活かされ、利用者は元より、家族・地域住民・行政に至るまで絶大な信頼関係が築かれている。コロナ禍の配慮で、インフルエンザにも対応できるよう、感染した場合は隔離用に防災・防菌のカーテンを設置できるよう、カーテンレールを設置している。職員はマスクにフェイスシールドを付け、手指消毒・換気などと徹底した対策を取っている。せっかくの理念であるが、マスクなどで笑顔が分かり辛く、職員には歯痒い思いがある。外出もできない現状ながら、家族アンケートや職員の話し方・笑顔から、楽しく落ち着いた雰囲気生活している姿が伺える事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「温かい笑顔」「優しい気持ち」「わかりやすい言葉」を私たちのモットーとして、職員全員で理念を共有している。利用者の自立支援に基づき、利用者の立場に立った支援を心掛けて毎日実践している。	理念は全職員に浸透している。「笑顔」を常に心掛けており、自然に利用者も優しい笑顔になって、「ありがとう」の言葉が飛び交っている。その様子を見た家族も笑顔になり、安心感に繋がると言う相乗効果がみられる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	例年は地域ボランティアのショーや、運動会などでは、近隣の方も参加して楽しんでもらっている。但し、今年は新型コロナウイルスの影響を受けており、交流を控えている。	管理者は長年地元で活躍されており、事業所も自然と地域に溶け込む形となっている。事業所のそばの道が100人近い児童の通学路になり、子供たちの姿や声などが利用者の楽しみにもなっている。コロナまでは近隣者もよく来訪していた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	電話や直接事業所に見える方など、近隣の方一人暮らしの方などの相談に乗っている。また、自治会長、民生児童委員など地域の方が参加する運営推進会議では、介護体験や研修報告をして理解を深めてもらっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月毎に開催し、管理者よりホームの生活・活動を報告し、利用者の家族にも話してもらうなど、参加者からの助言を得てサービス向上に生かしている。今年は新型コロナウイルス感染防止の観点から会議体としての開催は控えている。	2ヶ月毎に開催され、利用者とその家族は毎回1組ずつ参加、他には行政・自治会長・民生児童委員・元市議会議員・薬剤師・駐在の警察官・お寺の住職など多彩である。それぞれの立場からの意見や助言などがあり、事業所の業務向上や協力を活かされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日頃より亀山市高齢障がい支援室、鈴鹿亀山地区広域連合介護保険課の担当者に連絡・相談をするなど、連携を密にしている。	亀山市・鈴鹿亀山広域連合との協力体制は整っており、問題が起きてもスムーズに解決できる等意思疎通と協力関係がよい。また、行政からの講師の声がかかるなど、信頼も厚い。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束委員会を設置し、身体的拘束や利用者の行動を制限する行為を理解し拘束しないケアに取り組んでいる。カンファレンスや運営推進会議で取組みを報告し理解を得ている。	病院の治療上で拘束されていた方が家族の希望で入居され、車椅子になり、ターミナルまで支援できた事例もあり、職員は適切な知識と対応で支援している。運営推進会議にも報告している。外部研修に参加した職員はカンファレンスで報告している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	心理的虐待にならないよう、接する際は、いつも丁寧な言葉で声をかけ、人間らしさ尊厳を大切にし、自立支援を心掛け実践している。職員同士も介護時の注意点などを共有し、心にゆとりをもって虐待防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員会議で勉強する機会を持ち、法律・制度を理解し活用できるよう努めている。現在の利用者に該当者は無し。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結時、解約時、入居後の介護報酬改定の際など、都度よくわかるよう十分説明し、理解納得を得ている。入居後でもわからないところは、いつでも質問してもらい答えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者、家族とは日頃よりアットホームな良い関係を築けている。面会時での聞き取り、話し合い等で想いを確認している。また、玄関には意見箱を設置している。運営推進会議では、ご家族に毎回1名参加していただいております。	「とても居心地良い」との家族からの意見が多く、面会も多い。職員と気楽に話せる関係にあり、コミュニケーションは密である。家族協力も良く、玄関先の看板を書き換えていただいたり、草刈りも手伝いを申し出る家族もある。年1回、総勢50人にもなる家族会を行っており、関係の良さが伺える。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のカンファレンス(職員会議)で意見交換や提案を出し合い、業務改善に努めている。従業員同士が普段から提案しやすい環境であり、コミュニケーションをよくとっている。	月1回、全職員参加のカンファレンスで、感染委員・拘束委員・ヒヤリハット委員と役割分担毎に報告や研修内容などの勉強をしている。また、家族の要望、ケアプランの内容や見直し、日々の業務などを管理者と共に話し合い、運営や支援に活かした会議をしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の希望を勤務シフトに反映、勤務形態に無理が無く、やりがいがある明るい職場環境を保つよう整備に努めている。また、キャリアパス規程として、キャリアパス要件と階層別育成、給与体系、人事評価(自己評価)を定めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は他の職員とともに現場に入り、常に接している。職員を外部研修に参加させ、成果を会議の場で報告発表することで、スキルアップを図っている。また、資格取得のための学校、研修参加の機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス事業所連絡会の研修や、同業者の開催する講習会に参加するなど、より広く交流する機会を得ている。但し、今年は新型コロナウイルス感染防止のため、電話等の交流はしているが、研修講習会への参加は控えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にはケアマネージャーからの基本情報をもとに本人からの聞き取り、本人からできない場合は家族から要望を聞き、良い関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居初期は本人同様家族にも不安戸惑いがあるので、要望に耳を傾け不安を和らげ、職員がやることと、家族にさせていただくことを話している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	契約(入居)前に家族、本人が何を必要としているのか、聞き取り、要望を把握し、本人のために最もふさわしいサービスを考える。本人のために良ければ家族とも話し合い、他サービス利用を勧めるなどの対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自分でできることは少なくなっているが、できることは手伝っていただき、自宅のように無理のない穏やかな気持ちでいられるよう笑顔で接している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には面会時や電話にて、本人の日々の変化など、些細なことでも家族に伝えている。面会時は職員も一緒になって間を取り持つなど、本人と楽しく会話ができるよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の楽しかったこと思い出話など人や場所の話に耳を傾け、心の中での関係が途切れないよう支援に努めている。面会時にはゆっくり穏やかに時間を過ごせていただける空間づくりをしている。	コロナ禍以前は馴染みの方の訪問も多く、運動会への参加など良い関係が継続されていた。現在は電話が多い。利用者同士では昔の話で盛り上がるなど良い関係が伺える。また職員を大事な馴染みの人のように認識している利用者も多い。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士できる限り日中リビングで過ごすようにしており、レクリエーションや作業などを行っている。但し、今年は新型コロナウイルス対策で、机配置をレベルに合わせて交流ができるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	在宅へ戻った方、他サービスへ移行した方、医療機関へ移った場合については、家族や本人のケアマネジャーと過度にならない範囲で連絡をとるなどフォローに努めている。当ホームで看取ったご家族が訪問されることもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	第一に本人の希望を聞いて、また本人から聞けない場合は家族から聞いて、希望に沿って楽しく暮らせるよう努めている。	入居時に管理者と介護支援専門員が、利用者・家族などから話を聞き、希望や要望を聞いている。入居後は職員の日々の支援や話し合いなどから、利用者の思いを把握するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族から、これまでの暮らしの様子や、好み、仕事、性格など生活歴を聞き取り、本人との会話や介護に反映している。またセンター方式の書類への記入をお願いして把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の過ごし方はそれぞれの意思を尊重しつつ、見守り、声掛けなどで現状の把握は日々注意深く行っている。日報への記録、毎日の申し送り引き継ぎ共有し、状態の変化に速やかな対処に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族等との聞き取り、職員からはカンファレンスで問題点を話し合い、毎日の評価表で確認して介護計画を作成している。	支援内容は毎日確認し、モニタリングやケアプランは3か月毎にカンファレンスで検討している。基本は好きなものや得意なことを確認し、家族との話し合いや要望をケアプランに活かすようにしている。いつも認知症の緩和を視点においている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を細かくカルテに記入、気づきや特記事項など、カルテの情報を共有して、介護計画の見直しにも生かしている。カンファレンスで介護の問題点を取り上げ、意見を出し合い改善している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の体調が悪くなった時、家族事情で都合がつかないときなどは、管理者、職員が病院への付き添いを行っている。デイサービスや地域の方との合同レクリエーションなどの企画も行っている。(今年は中止している。)		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在は、多くは要介護度が高く外出は難しい。窓からの景色(学童の通学の様子、バルーン、花木、農作物など)を楽しんだり、ホームの運動会には地域の方に参加していただいている。(今年は運動会は中止)		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医で受診を行えるように家族の協力を得て支援している。現在は全員、かかりつけ医は町内の協定医(のぼのクリニック)である。	事業所協力医が全利用者のかかりつけ医である。医師と管理者はラインや電話でやり取りを行い、利用者の情報を共有し、安心できる医療を支援している。薬は家族が持参するので利用者の健康状態が把握しやすい。専門医への受診は家族が同行している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	代表者(管理者)が看護職で現場で働いており、職員は日々の気づきを共有し、管理者との連携で早く適切な受診が受けられるよう努めている。パートで看護師1名も勤務している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	救急搬送、入院時には病院まで職員が付き添い、病院、家族との情報交換を行っている。家族の相談にも努め、退院後の看護に反映させている。また、そうした場合に備えてかかりつけ医、家族とも話し合いをしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「重度化対応・終末期ケア対応指針」に沿って、入所時に重度化した場合や終末期のあり方について、説明と家族の意向確認を行っている。終末期には再度意向を尊重、確認し、ターミナルケアに取り組んでいる。	前年度は3名の看取りを行った。協力医のネットワークが軽く、看護師である管理者との連携は迅速・良好であり、利用者・家族・職員への安心にも繋がっている。管理者は利用者の居室に寝泊まりすることもあり、最後まで見守り支援している。家族との話し合いもできている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	心臓マッサージ、AEDの取り扱いなど、すべての職員が応急手当や初期対応ができるよう、訓練の機会を設けている。消防本部主催の普通救命講習を受講している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の訓練(市の消防参加と自主)を計画的に職員入所者全員参加で実施している。訓練では避難場所である小学校までのルート安全確認訓練も実施。指定避難所(公民館・小学校)より当施設が高所に位置しており、状況によっては当施設での受入れも想定している。	今年11月に地震の避難訓練を行い、来年3月頃にも総合訓練を予定している。災害時は事業所が安全との事で、自治会から食品などの提供、事業所は大型ガスボンベで炊き出しを提供できるなどの準備があり、地域との相互協力体制も整っている。セコムとの契約もあり安心に繋がっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	介護をさせていただくという気持ちをもって失礼のない言葉使いを心掛けている。一人ひとりのプライバシーを尊重し、居室・トイレ入室時のノック、声掛けの励行やトイレ誘導時なども常に丁寧な言葉で話しかけ、接するようにしている。	トイレの支援が難しい利用者に、支援させていただくとの気持ちで根気よく接した結果、スムーズにできるようになった。継続していく大切さと尊重する気持ちで接することの大切さを実感しながら支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の希望は常に聞き、何かを選ぶときには、答えやすいように言葉を考えて声掛けを行っている。言葉でできない方は表情で涙み取り、できる限り自己の意思での行動ができるよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	それぞれのペースに合わせた暮らしをしてもらい、できる限り無理やり押し付けることの無いよう、希望に沿って一人一人のペースを大切に心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	男性は毎朝髭剃り、女性は髪の毛のブラシかけ、髪をピンでとめるなど、身だしなみを整え毎日清潔でいられるよう支援している。希望者には2ヶ月に1回出張理容(美容師)で整髪してもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理は季節の食材を用い、一人ひとりの好みや嚥下力にも配慮して、状態に合わせた工夫をして、安全においしく食事をたのしんでもらえるよう努めている。後片づけ盆拭きなど、できる方には一緒に手伝っていただいている。	メニューは1週間分を職員間で検討、調理は職員交代で行っている。畑で取れた土付きの一番成りを利用者に見てもらい、料理に活かしている。利用中の夫を思う奥さんが作った野菜を利用者皆で食べたり、ミキサー食の利用者へも好みに合わせるなど、一人ひとりが食事を楽しむ工夫をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体重計測管理も行い、一人ひとりに合わせた摂取量と栄養バランスを工夫している。(栄養補助飲料(エンシュア)、OS-1 摂取)食間のお茶など、水分補給はたえず行っている。自力摂取ができない人は介助で対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎日朝と就寝前に 自分でできる方は自身で、できない方には一人一人に応じたケア方法で介助をして、必ず歯磨き、うがい、口腔用ウェットティッシュでのふき取りなどを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェックシートを活用して、排泄のリズム、パターンを把握して、タイミングをはかりできる限りのトイレでの排泄、自立支援をしている。多くの方はおむつを使用しており、おむつ使用の方には、不快の無いよう、適宜交換を行っている。	日中はおむつ使用者が5名、4名が紙パンツである。排泄支援はチェックシートを活用し全職員で取り組み、申し送りも徹底し、昼夜継続した支援をしている。結果、排泄リズムが整い清潔になり、快適な生活が出来、自立支援にも繋がっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事は繊維の多い物と十分な水分摂取、おやつではヨーグルト、牛乳、果汁など排泄に良い工夫をしている。軽い運動、入浴時の腹部のマッサージなどで便秘予防に取り組んでいる。便秘が続く場合など必要に応じ内服薬で対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	本人の体調、希望に合わせて入浴を実施。体調に注意しながら、一人づつ、ゆっくりとくつろいだ入浴タイムになるよう声掛けしながら介助し入浴してもらっている。	入浴は週2・3回、浴槽は三方介助タイプで重度化しても介助しやすい。袖風呂や入浴剤を利用したり、ゆったりと歌を歌ったり、昔の苦労話を聞いたり、希望を話し合ったり、大事なコミュニケーションの場となっており、一人ひとりに合わせている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室内環境を季節に応じて整え、快適に休息できるよう、体温調節、室内の温度、湿度の調整に努めている。夜は安眠できるよう、昼間をできるだけ起きて過ごしてもらっている。また昼食後は本人の希望に添って休んでもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師との連絡を密にし、服用する薬の変更があった場合の本人への影響、症状の変化など、理解に努めている。処方箋はカルテに添付し薬の内容を確認できるようにしている。服薬ミス(誤飲)を起こさないよう、ダブルチェックを行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	できることは役割として、生活に張り合いを持てるよう、洗濯物たたみやお盆ふきなどしてもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	気候の良い日は近くへ散歩(車椅子でも)に出て楽しんでもらっている。遠方へは体力的に難しい方が多いが、出来る方には奈良(大仏)や松坂(タイ焼き)などへ出かけてもらった。(現在はコロナ対策で遠方へは行っていない。)	前回の奈良へ行った折は、大仏が印象に深く残り、行った先々で家族へ実況報告の電話するなど貴重な時間を過ごした。今は外出は無理だが、終息したら鰻を食べに行こうと楽しみにしている。また近くの畑を見に行ったり、玄関前などの散歩を楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は個人で所持してもらっていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は職員が家族にかけ本人と代わったりするようにする。コロナで面会ができない分電話でのやり取りが多い。(面会は窓越しに行っている。)		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自然豊かな場所に立地し、共用空間は余裕ある広さでゆったり快適に過ごせる。台所はオープンで互いの顔が見える。フロアは自然光、風が入り四季を感じる。	居間は皆がフロアに出てきて、思い思いに座っており、フロアは朝日がとても良く入り、寒い時に背を向けるとホカホカと気持ち良い。天井には天窓が2ヶ所あり、クロスは青空に白い雲が描かれている。テーブル・ソファ・椅子など全て飛騨高山の木造家具である。夏は全居室の窓に「よしず」を立てるなど居心地良い空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファなどで、それぞれがお気に入りの好きな場所で日向ぼっこをしたりして過ごせるよう工夫している。独りになりたいときは居室に戻るようになるが、居間は大半をリビングでゆったり過ごしてもらっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	布団、枕、茶碗、箸、その他日用品、時計、家族写真など、使い慣れたものを持参して自宅感覚が持てるようにしている。クローゼットがあり部屋を広くすっきりして使っていただいている。	ギャッジベッド・褥瘡マット・押し入れと中に入れる木のタンスは事業所で設置、他は布団を始め、着替え・身の回り品・家族の写真など使い慣れた物を置いている。ベッドに腰掛け毛布を畳みながらのんびりしたり、居室の写真をフロアへ持ち出し思い出話をしたり、落ち着いた雰囲気となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	見てわかるように、居室ドアにぬいぐるみやトイレに目印(花飾り)を取り付けている。独歩可能な人には夜間センサー、車イス使用者には自操を促すなど安全と自立支援に努めている。		